

カレン

かれん

克倫

Karen Kayin, Pgakanyaw, Kanyaw, Phlon

解説

ミャンマー（ビルマ）およびタイに居住する民族。いわゆるカレン人には、広義のカレンと狭義のカレンとがある。広義のカレンには、カレン諸語を話すすべての民族が含まれ、その代表的な民族集団としては、スゴー・カレン(Sgaw Karen)、ポー・カレン(Pwo Karen)、ボエー・カレン(Bwe Karen)、パオ(Pa-0)、カヤー(Kayah)、パダウン(Padaung)などがある。「カレン人」の範囲はこれらすべてを含む場合から、狭義のカレンであるスゴー・カレンとポー・カレンのみを指す場合まで様々である。しかし、普通は、スゴー・カレンとポー・カレンのみをカレンと呼ぶことが多い。この2集団はカレン系諸民族全体から見れば言語的・文化的にひとつのまとまりを形成している。ただし、スゴーとポーのみに限っても、その中には様々な面においてある程度の多様性が認められ、カレン民族とは何であるかを明確に規定することは難しい。カレンの自称は、スゴー・カレン語でプアカニョーまたはカニョー、ポー・カレン語ではブロンである。なお、英語の Karen はビルマ語のカレンに対する呼称であるカインの古い発音に由来する。さらに、ビルマ語呼称はカレン語の自称の古形に由来すると考えられている。

カレン人の人口は、ミャンマー側 286 万人（1993 年推計）、タイ側 27 万人（1986 年）である。ただし、特にミャンマー側では捕捉されていない人口も多いとみられる。居住地域はミャンマーとタイの国境地帯を中心に、ミャンマー南部のエヤワディ（イラワジ）川のデルタ地帯や、マレー半島付け根のアンダマン海沿岸まで広がっている。カレン人がとくに多い地域は、ミャンマーのエーヤーワディー管区とカレン州であり、1983 年のミャンマーの国勢調査によれば、エーヤーワディー管区に居住するカレン人の人口は約 102 万人、カレン州に居住するカレン人の人口は約 36 万人である。カレン人の比較的多い都市の代表としては、エヤワディ管区の管区庁所在地であるパテイン（バセイン）、カレン州の州都であるパアンなどが挙げられる。また、ヤンゴン（ラングーン）市内のインセイン地区はカレン人の密集地として有名である。スゴー・カレンとポー・カレンの内訳は、ビルマの 1931 年の国勢調査によればスゴーが約 52 万人、ポーが約 48 万人と約半分ずつであった。スゴー・カレンとポー・カレンの分布は全体としては重なりあってはいるものの、スゴーの多い地域、ポーの多い地域というように、偏りがある。居住地には平地と山地があるが、全体として見れば、カレン人の人口はエーヤーワディー川下流域やサルウィン川下流域などに多く、平地に住む人口のほうが割合として圧倒的に高い。日本ではカレン人が山地民として紹介されることが多いが、その理由としては、外国人の往来の自由なタイ側に山地カレンが多いことが挙げられる。生業形態としては、山地のカレン人には今なお焼畑農耕が残り、平地のカレン人には水稲耕作が広く行われている。都市部に住むカレン人の職業は様々であり、医師・教師・公務員などの職業に就く者も少なくない。平地のカレン人はビルマ人にかなり同化している場合が多い。

宗教は、1983 年のミャンマーの国勢調査によると、エーヤーワディー管区に居住するカレン人では仏教徒 72.8%・キリスト教徒 26.0%、また、カレン州に居住するカレン人では 84.7% が仏教徒（カレン州のキリスト教徒の割合は記載なし）とあり、全体として仏教徒が多数派である。キリスト教の布教は 19 世紀前半にバプティスト派アメリカ人宣教師によって山間部において始まったが、後にカレン民族主義の高揚とともに、かえってデルタ地帯などの平地部で入信者が増えたという経緯がある。一方、ミャンマー・タイ国境地帯の山地においては、精霊信仰が行われている。ただし、精霊信仰はエーヤーワディー川やサルウィン川の下流域に住む仏教徒達の生活にもいまだに根強く残っている。ことに、スゴー・カレン語でオーヘー(Oxe)、ポー・カレン語でアオンヘー(Anxe；東部方言)あるいはアンハイ

(Anxai ; 西部方言) と呼ばれる、祖霊に対する儀礼は、形態の違いはあるにせよ、山地か平地かを問わず各地のカレン人に重要な儀礼のひとつとして伝えられており、カレン人としての仲間意識を生じさせる一要素となっている。なお、カレン州に住むカレンには、レーケー(Leke)、タラコウン(Talakhon)、プータキー(Phutakhee)などのカルト的集団がある。これらはいずれも平地のポー・カレンの間で生じたもので、このうちレーケーとタラコウンは1世紀以上の歴史を持つという。もうひとつのプータキーは1990年代になって現れたものである。

ミャンマーの植民地時代、イギリスはカレン人を優遇して積極的に官吏や警察官として登用した。このことはビルマ人とカレン人との溝を深めることにつながり、1949年に始まるミャンマー政府に対する武力闘争の一因となった。現在でもカレン人の一部は、独立あるいは自治権獲得を求めて武力闘争を行っている。カレンとビルマの関係は、ミャンマーの諸民族の関係の中でも最も険悪なものと言われるが、その背景にはかつてのイギリスの植民地政策が大きな要因として横たわっていることは否めない。カレン人の武装勢力であるカレン民族同盟(Karen National Union)は数あるミャンマーの反政府勢力の中でも最も強大な勢力を誇っていたが、ミャンマー・タイ国境を流れるムーイ(Moei)川沿いの総司令部マナプロー(Manerplaw ; スゴー・カレン語で「勝利の地」の意)が1995年に陥落し、かなり弱体化した。ただし現在でも国境地帯では戦闘が続いており、多くのカレン人難民がタイ側へと流出している。

言語に関して、いわゆるカレン語にはスゴー・カレン語とポー・カレン語があり、この2つは系譜的に極めて近いが相互理解はほとんど不可能である。カレン語の基礎語彙の多くはチベット・ビルマ語派との一致を示すが、チベット・ビルマ諸語は一般的にSOV(主語・目的語・動詞)という語順を取るのに対してカレン語はSVOであり、言語系統論上の謎とされてきた。しかし最近では、カレン語はやはりチベット・ビルマ系言語であり、かつてSOV型だったのがモン・クメール系言語などとの接触によって語順を変えたとする説が有力になってきている。スゴー・カレン語にもポー・カレン語にも独自の文字がそれぞれ複数種類あり、そのうち、1830年代にアメリカ人宣教師によって考案されたキリスト教スゴー・カレン文字が最古のカレン文字とされることが多い。しかし、18世紀中葉に既に仏教を受容していたと伝えられるカレン州のポー・カレンが、仏教文書作製のためにモン文字を改変して作った仏教ポー・カレン文字(ポー・カレン貝葉文字)という文字があり、この文字のほうがキリスト教スゴー・カレン文字よりも古くから存在していた可能性もある。

なお、カレン人がデルタ地帯などの平地に住みはじめたのが相当早い時期であることは、カレン語の方言差から窺い知ることができる。特にポー・カレン語は、エーヤーワディー・デルタで話される西部方言とカレン州で話される東部方言の違いが極めて大きく、ポー・カレン語による意志疎通は非常に困難である。スゴー・カレン語にもポー・カレン語ほどではないが、東西でかなりの方言差がある。カレン人の平地化は19世紀のイギリス領化以降であるかと考えられている傾向があるが、東西方言の差異から判断するに、デルタなどへの進出はこれよりはるか以前から始まったと考えるのが妥当であろう。ビルマ語碑文に刻まれた記述から、パガン時代(11世紀~13世紀)には既にカレン人がビルマの中央平原に居住していた可能性があるとする、Luce(1985)による歴史学的見解もある。

参照項目

カヤー、パダウン、パオ、ビルマ

参考文献

飯島茂『カレン族の社会・文化変容』東京：創文者，1971。/ Keyes Ch. F., ed. Ethnic Adaptation and Identity: the Karen on the Thai frontier with Burma. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues Inc, 1979。/ Luce, G. H. Phases of Pre-Pagan Burma. Oxford: Oxford University Press, 1985.

加藤昌彦